

高橋忠次郎に関する歴史的研究(1)

—東京女子体操音楽学校の創立者として—

掛 水 通 子

は じ め に

1)
高橋忠次郎は、これまで「明治30年代女子高等師範学校、日本体育会体操学校などの教師を兼ね、もっぱら遊戯の研究につくした人」²⁾、「特に女子体育の立場から唱歌遊戯や音楽遊戯を奨励」³⁾「特に体操に音楽を配するという着眼は新鮮であった」⁴⁾と評価され、明治34年あるいは明治35年に「日本遊戯調査会」を設立し、⁵⁾「遊戯雑誌」を発行し、我が国女子体育教員養成機関の嚆矢として現在の東京女子体育大学の前身である「東京女子体操音楽学校の実際の設立者」⁶⁾であり、明治39年12月には渡米し、そのまま留まり、大正3年頃客死⁷⁾したとされている。

しかし、忠次郎が明治30年代に活躍するようになるまでのいきさつ、彼が中心となって設立した「日本遊戯調査会」、「東京女子体操音楽学校」の設立事情は明らかにされていない。さらに、渡米後の活動および死亡日にいたるまでについては全く不明である。

本稿では、忠次郎の生い立ち、勉学時代から、遊戯研究に携るまでの事情、彼にとって最大の仕事であった文学会の設立、日本遊戯調査会の設立を経て、東京女子体操音楽学校の創立を果たした経緯、さらに、渡米後の活動について明らかにしようとした。本稿では東京女子体操音楽学校の創立者としての忠次郎を述べる。したがって、忠次郎の遊戯論、女子体育論及び東京女子体操音楽学校の教育については別稿に譲る。

1 生い立ちと勉学時代

1. 生い立ち

明治3年3月13日に、忠次郎は、宮城県宮城郡松島村磯崎字磯崎7番地⁸⁾で、長治郎、ゑいの二男として生まれた。彼の家は旧家で大地主であったという⁹⁾。彼は松島の海岸で育ち、郷里を愛し、後々まで自らを「濱邊の黒人」と称している¹⁰⁾。忠次郎には1人の兄、八十吉がおり、その1人娘のきよせは、忠次郎の学校へ第1期生として入学し、彼の身の回りを助け、のちに彼の学校の教師であった谷口謙造と結婚し、二人共良き協力者であった。

松島村には明治6年7月に学制により高城小学校が設立され、7年には112名の児童と2人の教員を擁していた¹¹⁾。15年になって宮城県下の小学校就学率は、男69.35%、女15%であった¹²⁾。この頃忠次郎はおそらく、前記の小学校へ通っていたのであろう。少年時代に

については定かではない。20年12月、彼が17才の時から前記小学校の後身である高城尋常小学校¹³⁾に「授業生」として勤務しはじめた。¹⁴⁾3ヶ年間の免許¹⁵⁾を受けており、ここでの小学校教員は22年10月18日に辞するまでの2ヶ年間であった。(以下明治を略す)

忠次郎はおそらくこの間に授業実践の経験から体育を学ぶ必要性を認識したのであろう。

2. 東京体操伝習所に学ぶ

授業生を辞すると上京し、10月26日には私立の東京体操伝習所へ入所した。官立のリーランドの体操伝習所は18年3月の東京高等師範学校附属への変更を経て19年4月に廃止され、東京師範学校体操専修科となり受け継がれていたが20年7月15日から32年6月までは募集を中止していた。¹⁶⁾体操伝習所の廃止後、その卒業生等により私立の体操学校が次々と設立されていた。¹⁷⁾その中において19年8月に、いち早く体操伝習所の卒業生により設立されたのが私立東京体操伝習所であった。忠次郎の上京時に東京には5校の私立の体操学校があり、体操伝習所卒業生によるものは私立東京体操伝習所のみであった。¹⁸⁾したがって当時、最も歴史があり、体操伝習所の教育を受けついで学校であるとみてよいであろう。

私立東京体操伝習所は、19年3月に共に、体操伝習所を卒業した、中嶋久太郎(校長)と山本泰一郎により19年8月30日に麴町区に設立された。小学高等科卒業以上の17~25才の男子が入学可能であり、修業期間は3ヵ月以上6ヵ月以内の短期間であった。設立時の学科は、体操科(週18時間)、生理学(週4時間)、体育学(週2時間)であり、体操科はさらに、普通体操科(週12時間)―整頓法、徒手体操、矯正法、亜鈴、球竿、棍棒、木環、豆囊、隊列運動―と、歩兵科(週6時間)―生兵学、柔軟体操、そして郊外遊戯を適宜授くであった。¹⁹⁾

18年の体操伝習所は、6ヶ月の修業期間で術科、27時間以上―兵式体操12、軽体操15、学科(兵学ノ大意、人体ノ構造、体操術ノ原理など)15時間以上²⁰⁾であり、修業期間、週時数共に東京体操伝習所は劣るものであった。

21年4月1日には改正があり、授業時間は増え、軽体操、(12時間)、兵式体操、(12時間)、器械体操(3時間)、生理学(3時間)、体育学(2時間)で、戸外遊戯、軍歌、操槍術は適宜授けていた。²¹⁾忠次郎はこの学科によっていた。

改正によってもまだ劣っていた。教科書は体操伝習所と同様の、新撰体操書、新制体操法、新式歩兵操典、弗氏生理学と他に、小学普通体操法(坪井玄道、田中盛業著)、戸外遊戯法(同)、躰操教範(陸軍)を用いていた。²²⁾後になって忠次郎は「坪井玄道の第1弟子」²³⁾であったといわれる。直接玄道から教えを受けた記録はない。しかし玄道の普通体操の正系で学んだのであった。

忠次郎は、明治38年8月に記した履歴書に、「体操伝習所デ、普通体操、兵式体操、生理衛生解剖、唱歌、風琴ヨ修メル」と記している。私立東京体操伝習所には、はじめ、附属唱歌速成講習所があり、「唱歌、風琴、理論と適宜に寫譜、授業法」を教授しており、両所を「兼修スルヲ得」²⁴⁾とされていた。22年4月になって、東京唱歌専門学校の設立認可により、この講習所は当然休業となっていたが、私立東京体操伝習所生は、この専門学校で兼習することができた。²⁵⁾したがって忠次郎は東京唱歌専門学校で兼習したのであろう。彼は幼時より笛の演奏

を得意としていた²⁶⁾ 事もあり兼習の道をとったのであろう。彼は、23年3月20日に卒業した。後に、宮城郡誌に忠次郎について「壯年出京して諸種の學術を學ぶ²⁷⁾」と記されている。彼は、上京すると、東京簿記精脩学館にも学び、22年12月には商用簿記学を、23年2月には官用簿記学を、そして23年4月には銀行家計簿記科を卒業しているのである。

2 日本遊戯調査会の設立

1. 小学校訓導として文学会を設立

私立東京体操伝習所を卒業後、同年8月に小学校体操科の教員免許を受け、24年1月29日から12月4日までは北豊島郡南千住町瑞光高等小学校へ体操科訓導として勤務している。同時に24年6月から25年12月24日までは東京府教育会附属小学校教員速成伝習所に学んだ。

このころ忠次郎は小学校の訓導仲間5人で当時高等教員(中等教員)を養成する私立学校が少なかったため、「変則的の高等師範学校を起して我々も研究し雑誌なども発行しよ一では無いか²⁸⁾」という企画で文学会を設立した。講師は海外留学帰りの学者や高等師範学校の教員²⁹⁾に頼み、教育、倫理、心理、国語、漢文を、毎夜6時から10時まで大日本教育会を借りて会場として行なわれた。実際の発起人は5人の小学校訓導であったが、表向きには大日本教育会の役員が着任した。しかし別の組織であった。発会式は明治26年11月6日に行なわれ、「教育時論」は「教育家の文學會」の見出しで、「大日本教育會内に設立せられ、去る六日午後六時發會式を挙ぐ會員數凡そ百十五名頗る盛況なりしと云ふ³⁰⁾」と報じ、また、「大日本教育会の内に設けたる文學會は、熱心なる府下の小學校教員諸氏の發企せし者にて、大日本教育会の家屋を借りて開会すれども、直接に同會にて管理するにあらず。其會員百七十名もありて、(中略)東京市の教員が、自ら研究の念を起し、斯かる有益なる会を設けたるは、地方の模範ともなりて教育上に好影響を與ふべし³¹⁾」と報じ評価している。

当時、大日本教育会は文部省と衝突し、政論禁止の訓令³²⁾にもより会員が減少し、役員、文部省の主な官吏は脱会し、有栖川宮殿下も総裁を辞退するという状態であった。³³⁾この様なかで、大日本教育会とは別の組織であったが、毎日200名近い会員が出入りするの、辻会長は文学会のためには親切に尽力した。³⁴⁾

文学会は2年間で卒業式をあげ、卒業生は文部省の検定試験に多数合格し私設としては好成績であった。また、講義録は敬業社から「文学会講義筆記録」として出版された。³⁵⁾

2. 西村正三郎による遊戯研究のすすめ

文学会の教育の講師であった西村正三郎は5人の訓導に遊戯研究についての相談をもちかけ、それが日本遊戯調査会の発端となった。忠次郎は当時の様子を次の様に述べている。「予、之が研究を思ひ立ちしは去る明治26年の秋³⁶⁾にして故西村正三郎氏の囑に因りてなり氏が在米の當時『國民教育に於ける必修学科は之れを各種の学科として分くる必要なし総て遊戯に依りて其の知能を與へん』との立案の許に研究せる米人あり西村氏と会見の際、氏に問ふに日本教育家中之れ等の研究をなすものありやの意を以てす、氏は在りと速答したり而して氏歸朝の

後前きの研究者来朝し(明治26年の初秋)其の研究上の便宜を與へられんことを乞へり之に於て西村氏は周章狼狽なす所を知らず、蓋し同氏が在米富時の速答は談笑場裏の戯言に過ぎざりしを以てなり然れとも今は詮方なし責めては之れが材料を蒐集して便宜を計らんとの思案の許に日本遊戯調査会を創立するに至れり³⁷⁾である。したがって、忠次郎は、それまで1小学校訓導であり、遊戯に興味を持っている訳ではなかった。それが西村氏の囑により遊戯研究に携ることとなったのである。

来日した学者名は不明である。西村正三郎は、武蔵國藩士の末子として文久元年1月28日に生まれ、年期従弟、小学校教員を経て、埼玉県属となり、その時、貝原益軒の著書の訓訳を手がけ、16年には埼玉県私立教育会を創立し雑誌の編集をし、17年には中学助教諭をへて18年には開発社設立と共に教育時論の主筆を勤めていた。22年7月から米国マサチューセッツ州立師範学校で全科を、その後ニューヨーク大学で教育学を専攻し、歴史、哲学も修めて24年12月に帰国していた。帰国後は再び教育時論の主筆を勤め25年8月からは開発社の社長の任にあった³⁸⁾。この時文学会の講師をも勤めていたのであった。西村は渡米前に、「歌謡教育論」(明21年)を、帰国後は「教育学綱要」(明27年)、「教育学史(文学会講義筆記録)」(明30年)、「海外教育史要(師範学校教科用書)」(明26年)等を著わしていた。彼はフレールについて紹介している³⁹⁾ものの特に遊戯について研究している訳ではなかった。

3. 日本遊戯調査会の活動

西村正三郎を主幹として日本遊戯調査会は明治26年11月3日に創立し、活動は始まった。それは、①日本遊戯の調査……童謡を東京音楽学校鳥井沈教授について調査、②研究相談の場として神田区小川町に「文酒家」を設け、舞、踊、清楽、洋楽の稽古練習⁴⁰⁾③それまでに出版されていた遊戯に関する書籍を調査……遊戯書19冊、体育書12冊から遊戯を収集し特に「多勢の生徒が一同に運動が出来る様な種類」を収録⁴¹⁾④そのころ東京府内校長の有志により小学校の遊戯の調査が開始された事に関連して、研究結果を東京府教育会へ送呈するため、27年春からは神田区仲猿楽町私立豊額小学校で実験を高橋を主任として毎日午後3時から行なった⁴²⁾⑤ドイツから図書を購し訳述を手がけていた⁴³⁾以上の活動を忠次郎が中心となって行っていたのであった。この頃、忠次郎は27年5月からは日本橋区久松尋常小に専科正教員として、同時に高等師範学校附属音楽学校体操科講師も囑託されていた。教育現場での実践も行っていたのであった。

以上の様な活動をしていた。しかし「鼓吹するの時機なき」⁴⁴⁾状態であり、西村は29年1月26日には病の為に死亡した⁴⁵⁾。忠次郎はその時の状況を、「土崩互解の非運に至らずと雖も予輩らのために僅かに一縷の命脉を繋ぐのみなりしなり」⁴⁶⁾と述べている。その後、日本遊戯調査会の母体の文学会は、韓国教育会の設立を企てた事により費用を損失し、広告社への支払いが不可能となり、別組織であるにもかかわらず、大日本教育会社会長宛に訴訟が起り、その責任をとり、会計の任にあった忠次郎ら2名は任を離れる事になった⁴⁷⁾。忠次郎は30年6月21日に久松尋常小学校と高師附属音楽学校を辞し、香川県尋常師範学校へ転ずる事になった。他の4名の訓導たちも、病に倒れたもの、急死したもの、転職したもの東京を離れ

たものという状態⁴⁸⁾で、日本遊戯調査会はこの時、一時休止となったのであった。

4. 香川県尋常師範学校へ

訓導をしながら2, 3年間日本法律学校へも通っていた忠次郎は、多数の法律書を携え、法律学生の見送りを受け、四国へ渡った。⁴⁸⁾ 明治30年6月22日付で香川県尋常師範学校体操科助教諭兼書記として着任した。⁴⁹⁾ 忠次郎は唯1人遊戯研究を継続できる立場にあった。彼は熱心であり、故郷松島と東京を思いつつ教育研究に励む日々であった。後で続々と出版する書籍の構想を練り、草稿を書き、また地方の教育界に於ても活躍したのであった。

この頃、後に東京女子体操音楽学校の後継者となる藤村トヨも香川にあった。トヨは、この師範学校に28年4月に入学し、既に、29年3月には病気の為に退学し、29年6月から31年4月までは母校の坂出尋常小学校で代任訓導をつとめ、以後は加茂尋常小学校に教鞭をとっていた。そして忠次郎より一足早く4月には上京し女子高等師範学校本科理科へ入学したのであった。⁵⁰⁾ これまでトヨは忠次郎について「女高師時代の恩師」、「香川県師範学校並びに女高師時代に指導を受けた」と述べており、両者の出会いについて問題であった。しかしトヨは後者を記したのは1度だけである。⁵¹⁾ 同じ香川にはあったが出会いはなかったのであろう。忠次郎も32年5月には2年足らずの香川での生活に終止符を打ったのであった。

3 私立「東京女子体操音楽学校」の創設

1. 再び東京へ、女高師奉職とトヨとの出会い。

日本体育会はそれまでも附属体操練習所を設けていたが、明治32年からは政府からの補助金を得、会務の拡大を計っていた。⁵²⁾ 忠次郎は依田直伊、小野泉太郎⁵³⁾の推薦により日本体育会体操練習所(33年5月には、体操学校と改称)へ招聘されることとなり、上京してきたのであった。⁵⁴⁾ 32年6月から、36年9月まで(途中、33年12月から34年2月まで退いた)、教師をつとめた。⁵⁵⁾ 忠次郎はこれまでの研究、実践をいかしさらに遊戯の研究を進めた。そして早くも、32年8月には、依田、小野、との合著で「最新ベースボール術」⁵⁵⁾を、33年5月には依田と共編で「音楽応用女子^{体操}遊戯法」を出版し、以後も次々と成果を著わしていったのである。

これらの活動が認められ、33年12月には、体育界第1人者であった坪井玄道の欧米留学のための後任として女子高等師範学校の体操科教師を嘱託されたのであった。この女高師への奉職は彼にとって多くの意義があった。まず、社会的に信用を得、彼が次々と出版する図書はどれも再版を重ねた事、次いで、女子の体育に関する研究、指導に一層力を入れた事。彼は既に西村正三郎の「女子体操ハ須ラク楽器ヲ使用シテ興味ヲ副フベキ」⁵⁷⁾という教えにより、女子の体育の分野の研究を重ねていた。数年間にわたる各学校での実践と、外国書籍を参考にし、さらに西洋人からの実地伝習によって、「音楽応用女子^{体操}遊戯法」を著していたのであった。それは「女子体操の改良」⁵⁷⁾を唱える者があっても、実際の方法を記述したものがなく、課業を随意の運動にしたり、全廃している学校が多いので、高等女学校、高等小学校の教科用書に編集したものであった。⁵⁷⁾ 特徴は、「呼唱ヲ廃シテ其調節ノ緩急ハ楽曲ニ合シテ行フ」⁵⁷⁾も

のでそれにより女子に於て「最も快樂でかつ静粛に」⁵⁷⁾「動作優美で女子の品位をそこなう憂はない」⁵⁷⁾もので準備法、体操法(普通体操法を骨子とした)、遊戯法から成り、遊戯法は女高師、同附属高女、音楽学校、華族女学校で課しているものから優美な部分を取り出したものであった。彼は女高師に於て一層研究を進めた。最後に藤村トヨとの出会いである。トヨは34年4月には病気の為に退学し9月までは撰科生として通学していた。師弟関係にあったのは僅かであった。学業を続けられない程病弱のトヨであったが、女高師で習得した体操・ダンスが彼女の生涯を決定することになる。トヨは帰郷し静養中11月から、近所の国分高等小で代任訓導をしていた。35年2月から、5月に高松で開かれる第8回関西府懸連合共進会の関西教育者大会での各小学校生徒大運動会⁵⁸⁾に出場する為に東京で習ってきた体操、ダンスの指導を依頼され、3カ月の練習で健康となり、林田村長明寺川原でのトヨの率いるダンスは称賛を得、彼女はこれをきっかけにして体育の道を歩むことになる。10月には体操、理科の教員として私立丸亀女学校に抜擢され、翌1月には得意科目の数学、理科のノートを焼き払う事により体育への道を決意したのであった。⁵⁹⁾その月、高松で行なわれた香川県師範学校卒業生による忠次郎を迎えての遊戯講習会に参加し、⁶⁰⁾つづいて文部省の体操科教員検定試験を受けた。37年4月に女学校を退き、恩師忠次郎に呼ばれ私立東京女子体操音楽学校に奉職した。

2. 日本遊戯調査会の復興

東京での仕事が軌道に乗った忠次郎は、「稍睡眠の状態であった」⁶¹⁾日本遊戯調査会の活動を「之れが実務に鞅掌せる我れは聊か愛惜の情に堪へざるものあり」⁶¹⁾であったから再開させ、機関雑誌として「遊戯雑誌」を34年9月25日に発行したのであった。第1、2号によると、主幹は西川政憲であり、賛成員として、忠次郎、小野、依田をはじめとして可児徳、松田正典、白井規矩郎、山口酉三郎ら44名がついた。さらに、1号によると、懸賞遊戯審査員の任に、忠次郎、小野、依田があたり、3号で調査委員と変更し可児、山口が加わった。³⁴⁾忠次郎は5号(35・3・25)で主幹となり9号(35・8・15)では監督の地位についた。10号(35・9・15)に初めて会長として松平直敬が記載されている。会長は、2巻4号(36・6・15)では、松平直敬の貴族院当選により、永井直哉が就任し、主幹、忠次郎、特別顧問 依田、小野、可児、山口であった。したがって日本遊戯調査会は忠次郎を中心として復興されたのであった。

会の設立目的は、3号によると「本會は各種学校並に家庭に於て行ふ遊戯の研究調査を為し、以て斯道完全の発達を期する」⁶²⁾であり、10号になり「本邦古有の遊戯と欧米各国の遊戯とを調査して教育上最も有益なる遊戯を構成し、斯界に貢献せんとするにあり」⁶³⁾と改められ、以後はこれによった。この目的を達する為の事業は途中で変更があったが、次の5点、即ち、1.会員を募集すること、2.各府県枢要の地における支会支部活動、3.講習会の開催、4.内外の遊戯の学説、遊戯法及び遊戯用器械等の調査考究、5.図書、及び機関として「遊戯雑誌」の発行⁶²⁾⁶³⁾⁶⁴⁾であった。1.については、35年(4号、2.25)には1200人余、36年(2巻5号、7.12)には2,300人余、37年(3巻4号、1.15)には3,000人余であった。会員は各学校の教員を主体としていた。2.については、支会支部の設立以前は地方委員により地方通信が行なわれ、運動会の様子等が遊戯雑誌に掲載された。支会支部はまず、35年8月に香川県、福岡県、三重県、栃木県、12月に徳島県、静岡県、沖縄県、京都府に各支

会が結成され、他に東京市内には、麴町、浅草、本所、日本橋に設けられた。⁶⁵⁾ 会員は1と同様に教員が主体であり、講習会の開催が主な活動であった。3については、34年には遊戯雑誌の発行以前の8月に、山田源一郎(唱歌)、忠次郎(遊戯)を講師として166名(内女子42名)を集めて遊戯夏季講習会が神田中学校に於て実施され、12月から翌1月にかけても、体操、遊戯、唱歌の冬季講習会が100余名を集めて神田中学校で実施された。以後も学校の各休日に開かれ、36年8月には地方講習会が15ヶ所を数えている。4についての成果は毎月の「遊戯雑誌」を通して発表された。忠次郎自身、ほぼ毎号発表しており、その内容を大別すると、英国、米国、独逸で行なわれていた遊戯を紹介したもの、⁶⁶⁾ 忠次郎自身が作戯した遊戯の紹介、⁶⁷⁾ 忠次郎自身の経験談⁶⁸⁾ 等であった。遊戯用器械については、4号では、遊戯体操器具製作所を設置したと記述があるが、定かではない。日本遊戯調査会の監督の器械製作販売所として内外教育品商社、北川商店を指定し、⁶⁹⁾ あるいは、調査会撰定の20余点の「新撰遊戯器具」を教育品製造社⁷⁰⁾ から、調査会の調査による数十種の器具を入れた「新案學校遊戯器具」⁷¹⁾ を榊原文盛堂から発売しており広く各学校で使用された。5については、「遊戯雑誌」はほぼ月1回、最初は1号(34.9.25)～12号(35.1.2.15)まで、次に2巻1号(36.2.2.5)から6号(36.7.30)、3巻1号(36.9.30)から6号(37.3.15)、そして4巻1号が37年4月15日に発行された。

忠次郎は明治39年7月に「6歳の機関雑誌は十数万の冊子を頒布した」⁷²⁾ と記している事から、これ以降も出版された。しかし、現在、所在が不明で探索中である。支会支部もこれを機関雑誌とし、後述する体操教員同志会(のち體育奨励会を経て、国民體育奨励会)の機関雑誌も「遊戯雑誌」の1部を借り、東京女子体操音楽学校の募集広告および関係記事の掲載もし学校を全国に広める役割を果たした。図書は会員個人によるものが多く、日本遊戯調査会によるものは、「小学適用遊戯軌範」⁷³⁾ (高橋、小野校訂)「最新舞踏全集」(高橋校閲、榊原文盛堂、明治36年7月)等であった。

日本遊戯調査会の再建後、35年5月には、並列して「体操教員同志会」が「本会ハ體育研究者、一致團結シテ斯道発達隆盛ヲ計ルヲ目的トス」として結成された。機関雑誌、事務所共調査会を借用したものである。会員は高等師範学校若しくはそれと同等以上の教育に従事するものと規定した特別会員と他の通常会員から成っており、当初特別会員は10名、36年末になり特別会員は19名、通常会員は110名であった。当初から会員互選により、理事に忠次郎と可児がつき、35年12月になって松平直敬が会長に着任した。事業は、講習、支会、機関雑誌の発行と、調査会と同様であったが、研究対象を遊戯に限定せず、会長による就職斡施を行う点は異っていた。講習は文部省検定受験者のためであり、他に留学帰りの井口阿久りや坪井玄道を迎えての講演会の開催等を広く実施したのであった。

35年11月には「體育奨励会」と改称し、36年1月には、検定受験者のために常設体操遊戯講習部が設置され、新たに遊戯研究に関する事業も加えていたのであったが、36年5月には、会費前納の会員が5分の1となり、維時が殆んど困難となり1時休会する。

半年の休会ののち、12月になり、「国民體育奨励會」と改称し再興された。この時機構の整理が行なわれ、日本遊戯調査会とその附屬的存在であった東京女子体操音楽学校は奨励会の1部となった。事業は大きく2つに分け、その1つは、教員養成の為の事業で、「東京女子体操音楽学校」と「東京体操伝習所」⁷⁴⁾ である。1つは、「日本遊戯調査会」であり、その中に

「1.遊戯雑誌社, 2.遊戯音楽練習所, 3.櫻舞踏倶楽部,⁷⁵⁾ 4.出張講習会, 5.支會及支部, 6.器具製作所」があった。⁷⁶⁾

3. 東京女子体操音楽学校の創設と忠次郎の役割

(1) 東京女子体操音楽学校設立以前の女子体育の概略

明治初期には女子体育に関しては衛生論として、女子のつとめとしての育児と家事の面から必要が述べられ、運動の必要性を論じたものは少く、10年代末には西洋婦人や男子との比較から日本婦女子を改良するには運動が必要であると主張されはじめた。女学校、高等女学校についてみると、官立では、明治5年以後「養生法」が課され、8年には「体操」が加わった。16年には「軽運動」が週2時間課されたが、19年末には教科時間外に課される。このころ公立では「体操」をほとんど実施しておらず、私立のプロテスタントキリスト教主義女学校の中には「柔軟体操」や「婦女子の体操」をアメリカ合衆国やカナダの師範学校や大学出身の婦人教師により指導されるものがあった。

20年代になると、衛生論に運動を加えて論じられ、女子体育の主目標は強い子供を生むために女子の身体を強健にすることであり、国家にとって有益であるためであった。広範囲にわたる運動が奨励されるようになった。女学校、高等女学校については、官立では明治26年以後、「普通体操」に「遊戯」を加え週2時間男子教員により指導された。公立では明治26年の調査によると7校中4校が「普通体操」を中心として実施されていた。プロテスタントキリスト教主義女学校はほとんど実施されたが朝食前や放課後の授業時間外に適宜に実施され、正規の授業時間内に実施されるのは希であった。

30年代において女子教育の目標は20年代と同様、国益になる良妻賢母の育成であり、体育もそれに準じていた。多様の運動が奨励された。高等女学校においては、徐々に「普通体操及遊戯」が実施されるようになる。明治28年1月29日に「高等女学校規程」で、体操は必修となり、「普通体操若シクハ遊戯ヲ授ク、体操ヲ授クルニハ精神ヲ爽快ニシ身體ヲ健康ナラシメコトヲ務ムヘシ」と定められ、1～4年生は週3時間、5～6年生は週2時間の実施となった。32年の「高等女学校令」、34年の「高等女学校令施行規則」を経て、36年3月9日の「高等女学校教授要目」では各学年共、「普通体操及遊戯」が週3時間課されることになり、「教授上ノ注意」には「体操ハ成ルヘク女教員ヲシテ之ヲ教授セシムヘシ」も加わったのであった。⁷⁷⁾

女子の体操教員の必要性は、それまでの女子体育の高まりから述べられるようになっていた。例えば成瀬仁蔵は明治29年の「女子教育」で「…殊に女学校に於ては醫學體操学に明るき女教師ありて、常に生徒の身體に注意し、且つ女子に適する體操術を教授し兼ねて生理衛生看護體操等の學理を講義せしむるを要す。今日凡ての女学校に於て斯る體操教師を要すること頗る切なり」⁷⁷⁾と述べていた。⁷⁸⁾

しかし、体操教員養成機関は、明治35年までに、体操伝習所をはじめとして13校が開廃校していたが、女子が入学可能な学校は1校もなかったのであった。

(2) 東京女子体操音楽学校の創設と忠次郎の役割

我が国の女子体操教員養成機関の嚆矢として私立「東京女子体操学校」は35年5月10日

に設立認可された。

まだ女子体操教員の必要性は認識されていなかったで、経営上の困難を承知のうえで、渡航を控えた忠次郎の体育界を去るに当たっての記念碑として学校の設立を企てたのであった。当時の様子を次の文が物語る。「…最初女子体操学校を創立する時に當りては、日本でも初めの学校だから志願者は少数だろーと言ふ者もあり、卒業したとて使ふ処が無かろーといふ者が多いので高橋氏の発起に誰も賛成するものは一人として無かった。」⁷⁹⁾ そればかりではなく計画中止の忠言をしたのであった。それに対し忠次郎は、「諸君の忠言は誠に辱なく思ふ併し『未だ時節が早いから止めよ』とは我意に入らない話である。諸君は時節が来たら創立せよとの意ならむ、僕は所謂世に先だつて憂ふるものである。比度の企業たるや決して金銭上の利益より計畫したのでは無い、實は僕は一兩年中には必らず渡航を企る者だがサテ今日まで十有五年の間斯道に盡瘁した我輩も何の名もなく轉職するのも不本意である。如何かして我国體操界の歴史の中に特筆大書は出来まいが其幾分たりとも斯界に盡されたと言ふことを後人をして知らしたい夫れには本邦の女子體操学校が何よりの記念碑であると思ふて決心した譯で幾ら金銭上に於て損耗をするとも素より覺悟である此の損耗たる予に採りては予が斯界に盡瘁したと言ふことを長へに廣告するので廣告料を支拂ふのだと思へは大丈夫であるから諸君は先ず創立するとして十分なる御副心を願いたい」⁷⁹⁾と答えたのであった。

前述したように、忠次郎は日本遊戯調査会の主幹として遊戯研究をすすめ、特に女子のための遊戯の研究に力を入れ、すでに「音楽應用女子體操遊戯法」を著わし、自ら作成した「四季のながめ」、「姫鏡」、「女子體育奨励の歌」等の行進遊戯を叢書として次々と著わし、これらは小学校、高等女学校において最も盛んな遊戯となっていた。また、忠次郎は日本体育会体操学校で体操教員養成の、女高師で女子教員養成の任にあった。さらに、両校の教師であったから社会的にも信頼があり、彼の著書はどれも再版を重ねていることから資力もあったと考えられる。これらの事情から、忠次郎は我国嚆矢の女子体操教員養成機関を創立するにふさわしい人物であったといえよう。

日本遊戯調査会の会員により35年4月開校を目標として準備が進められ、附屬的存在であった。東京府知事へ「東京女子体操学校」の設立願が35年4月23日に設立者、山崎周信の名で提出され、5月10日に「私立東京女子体操学校」として認可された。「女子師範学校高等女学校女子小学校ノ女子体操教員ヲ養成スル」ことを目的とし、修業期限ハ本科六ヶ月、研究科は期限を定めておらず両科合わせて75名を定員としていた。本科入学資格は、小学校准教員免許保持者、高等女学校三年級修業者、教職経験者及び同等の学力を有するものであり、研究科は高等小学校卒業者であった。教科は学科と術科に分かれ、学科としては倫理、国語、教育、家政、生理、解剖、衛生、体操＝関スル学科（造機学）の8科、術科は、普通体操、薙刀体操、普通遊戯、舞踏、救急療法の5科、ほかに随意科として「生花、茶、琴、礼法ヲ授ク」⁸⁰⁾としていた。授業時間は各科共毎週33時間であった。

認可に先立ち、遊戯雑誌6号（明治35年4月25日）の特別広告に「東京女子体操学校」と「東京女子唱歌学校」の生徒募集広告が掲載された。両校は兼習が可能であり5月15日が開校予定であった。設立者名は山崎であり、忠次郎は氏名が記された33名と他数十名に及ぶ「賛助員」の1人として、また、監督兼舞踏の講師として記載された。校長欄は空白であった。

講師は華族女学校、女高師、高師、東京音楽学校の教師ら23名⁸¹⁾で我国において最も権威ある教師達であった。

設立者山崎周信は、牛込区築地町6番地に居住する平民であるが、賛助員でも講師でも日本遊戯調査会の会員でもなかった。おそらく忠次郎らの計画に賛同して助力をしたのでであろうと思われる。したがって忠次郎は、実際には設立者であったが、自らは表向きは設立者も、校長も名乗らず、監督として経営に当たっていたのであった。

校長については準備の段階から人選が行なわれ、「体操も巧者でもあり斯界には興味を以て居るので校長の事も快諾せられた」⁷⁹⁾、賛助員の1人であった松平直敬が着任し6月8日の開校式には告辞をしたのであった。⁸²⁾ 公文書上では11月26日に校長認可願が許可された。松平は前述したように、日本遊戯調査会の会長も兼ねていた。彼は陸軍歩兵少尉正五位子爵で学習院研究科を終業し、栃木県第1中学校、私立日比谷中学校の教員を経て当時は学習院教授任務を囑託されていた。

開校するために校舎、校地を探した結果、戸外の運動場が広い（1625坪）ため、小石川区上富坂町39番地の独逸神学校を午後だけの使用で月30円で借りる事となった。神学校の監理人ハース氏が青年時代独逸において、体操の教師、遊戯体操に関する雑誌の発行の経験があった為快く貸してくれたものであった。⁸³⁾

遊戯雑誌6号（明治35年4月25日）に記載された、東京女子体操学校と東京女子唱歌学校の併立は、忠次郎の私立東京体操伝習所と東京唱歌専門学校が兼習可能であった事を模したものであろう。彼は体操に音楽を配した方法および行進遊戯に唱歌を結びつけた方法をとっていたから体操学校設立の際にも唱歌学校を設立しようとしたのであろう。設立願は体操学校のみを提出し、唱歌学校の設立願の提出は10月27日であった。しかし遊戯雑誌8号（35.7.5）の募集広告では東京女子^{体操}学校となっており、学校そのものは機能していたと思われる。唱歌学校の設立願に対して、「……一応実地ヲ調査シタル上詮議可然ト認メ候」⁸⁴⁾となっていたが、調査のうえで指導が行なわれたのであろう。11月22日には私立東京女子^{体操}音楽学校として校名変更願が提出され26日に許可され「音体」はスタートしたのであった。

経営の都合から、開校早々度重なる移転が開始する。開校後1月足らずの7月5日発行の遊戯雑誌8号の募集広告ではすでに小石川区茗荷谷町94へ移転している。これについて「……午後だけ借る校舎の費用を三十圓出すと言ふ事は出来ないと言ふことから二カ月計り借りて寄宿舎制度を採り山崎周信氏が学校創立者となり寄宿舎の一切を擔當することになった」⁸⁵⁾ という1文もある。開校時から公文書では設立者は山崎であったが、公文書はどれも時期のずれがあるから、この1文を採用することも考えられる。おそらく山崎は、資産家であったのであろう。公文書上では10月18日に茗荷谷への移転届が出され、10月29日に東京府は「寄宿舎設置ノ件併テ実地視察ヲナス事ト致度……」⁸⁴⁾と報告している事からそれまでに寄宿舎は用意されていたのであろう。茗荷谷は校舎23坪5合、運動場193坪2合5勺であった。

36年3月には麴町区飯田町4-36に移転した。1期生はわずか22人の入学、17人の卒業であり、延期を重ね、補欠募集をした2期生がようやく入学してきた時であった。以前にも増して狭く、校舎26坪5合、運動場は36坪2合5勺であった。

さらに、公文書には記録がないが、36年6月25日付の遊戯雑誌によると神田区仲猿楽町

15へ移った。当時ここには帝国女学校があり、おそらく借りていたのであろう。

同じく公文書には記録がないが、36年9月30日付の遊戯雑誌3巻1号によると、再び麴町区富士見町2-32に移転した。

5度目の移転はこの年の末、36年12月である(遊戯雑誌3巻3号)。公文書上では37年3月30日となっている。茗荷谷へ戻ったのであった。この時、3月29日には山崎から忠次郎への設立者変更の届が出された。36年12月は前述したように国民体育奨励会が再興され、日本遊戯調査会の附属的存在であった学校がその事業の1つに組み入れられた時であった。

遊戯雑誌4巻1号で、「高橋氏は版を重ねた著書の印税は調査会と関係ある事に使用した」と記され詳細については次号に述べると予告⁸⁶⁾しながら次号が入手できないため裏付けがないが、この時山崎の援助を断ち、自らが名実ともに設立者となったのであろう。

3ヵ月後の6月24日には、「校舎狭隘ニ付」下谷区谷中真島町へ移転し、ここでは1年2ヵ月の長期にわたった。建築物136坪、校舎敷地142.5坪、運動場252坪であった。

忠次郎にとっては最後の移転が38年8月になされた、北豊島郡日暮里村1088番地妙隆寺(通称花見寺)境内内である。建坪206坪、敷地1091坪で寺との共有である。39年2月1日にはこの寺の住職、福田観学が設立者に加わった。37年4月から教師をしていた藤村トヨは「明治39年4月、高橋忠次郎氏公職ヲ辞スルト共ニ永井氏ニ代リテ本校ノ校長トナリ、専ラ育英ノ任ニ当リ其ノ経営ノ方面ハ東京府下日暮里町花見寺住職福田観学氏ニ託シ、同寺内ニ移ス⁸⁷⁾」、「花見寺に居る時創立者高橋忠次郎はその経営を花見寺の住職に託されて渡米せられた⁸⁸⁾」と述べている事から、渡米を控えた忠次郎は、その後の経営を住職に委ねたのであろう。

第1代校長は松平直敬である。第2代は公文書に記録がないが永井直哉であった。日本遊戯調査会の会長は、36年6月に松平の貴族院議員当選により永井が就任しており、36年12月(3巻3号)から37年4月(4巻1号)の遊戯雑誌の広告には「校長、永井直哉」の記載がある。38年4月から8月の間に東京都へ提出されたと思われる「私立東京女子体操音楽学校規則⁸⁹⁾」には校長名を欠いており、忠次郎は監督者、本校創立者となっている。したがって再び校長を欠く期間がありその後、39年4月に忠次郎が第3代校長に就任したのであろう。忠次郎の名前が校長として初めて公文書に表われるのは渡米後の40年3月「校長高橋忠次郎代理、山本祐吉」の記載である。したがって忠次郎は創立者であり、校長であった時に渡米したのであった。

忠次郎の渡米後は山本祐吉が校長代理を務め、40年9月には太田勘七が任を継いだ。その後についてはトヨがしばしば述べる。「校長高橋氏渡米後在學生著シク減少、設立者福田観学氏ハ其ノ経営ニ支障ヲ生ジ、遂ニ同四十一年二月内容整ハザル故ヲ以テ東京府ヨリ来『三月限り閉鎖スベシ』トノ命ヲ受クルニ至レリ⁸⁸⁾」。この時からトヨの活躍が始まるのである。トヨは「当時私は講師として、教育、生理、解剖等受け持って居た位で学校に対しては何の権威もない者であったが、職員中には寧ろ学校を廃して、他人自ら新しく設立せんという野心を持ったものもあり、其他は是に対して再興すると云う熱心な者も無かった。当時数十名余りの生徒は団結して私に泣き縋ってきた、私は家庭もあり学校を経営すると言う意志は毛頭なく、高橋氏が渡米前に私と私の主人に学校を維持してくれと頼まれたのを断然断って、一時高橋氏に立腹せられた程であったが、卒業生のため、高橋氏に対する責任のため、女高師の先生方に奨めを

90) 受け」再興したと事情を説明している。恩師の町田則文、坪井玄道の労により閉鎖命令の取消を受け41年2月3日に本校設立認可の指令を受け、同日には規則改正許可願を学校長藤村トヨの名で提出したのであった。トヨは昭和30年に没するまで47年間その任にあり、わが国女子体育界、東京女子体操音楽学校－「音体」－のために尽したのであった。

4 渡 米

1. 渡米とその背景

忠次郎は39年12月末に渡米した。東京女子体操音楽学校では在校生、卒業生、教員が盛大な送別会を催し、郷里松島町においても12月6日に送別会が開かれ「渡米者の送別会」と新聞にも報じられたのであった。しかし現在、外務省外交史料館所蔵の海外留学生、移民者名簿、また外国旅券下付表にも氏名を見出すことができず、出航日については確認できない。この時、忠次郎は、姪きよせの夫であり教員であった高橋(旧、谷口)謙造を併った。⁹²⁾ 忠次郎の渡米はこれまで体育研究のためとされており、トヨは「生徒の増加に比して設備の不足を感じ、発心して、研究旁々設備費を作る為に一時学校を他人に委託して渡米せられた」⁹⁰⁾と記し、宮原小治郎は明治40年1月に「今や高橋氏遠く米国にありて専心研究に従事せらる」⁹³⁾と記す。しかし一方でトヨの言う費用を得る為からもう一步進んで、実業界への転職のためであったのではないかと考えられるのである。前述したように、忠次郎は私立東京体操伝習所への入所と同時に東京簿記精脩学館に学び、のちに日本法律学校にも学び、香川へ渡る際にも法律法を携え、学校創立の際には、一両年中には渡航を企て転職の予定であると述べたのであった。一両年中という予定が延びたのは学校の安定を待っていたためであろう。安定し創立者、校長となり時期を得、そこにもう1つの要因が加わった。即ち、38年11月に文部省へ報告された「体操遊戯取調報告」と彼の主張との相違があった。彼は「国民教育に在りては遊戯其のものの領分は体操の領分より更に幾倍の大ききあること委員諸氏も己に知る所ならん」⁹⁴⁾と批判し遊戯の比重が少ないため両調査せよと主張し、彼の研究の集大成として39年7月に「理論實際小学遊戯教科書」を著わしたのであった。また、取調報告はこれまでの普通体操に代わりスウェーデン式体操を認めるものとなった。トヨが述べる「明治37・8年頃から、日本には専らスウェーデン式体操を採用し従来において用ひられたるリズムカル運動は体育的運動に非ずと言ふ誤見より非常な圧迫を受け、日本体育の元祖坪井玄道氏が体育界を殆んど退いたと言ふ状態になったと同時に、(高橋忠次郎は)其の主張に圧迫を受け憤慨して日本を去り、米国に遊学したのは明治39年であった」⁹⁵⁾は、適格に当時に表わしているといえよう。

2. 米国での活動

忠次郎の米国での活動はこれまで全く不明であるとされていた。ただ米国で盲腸炎で死亡した事だけが明かであった。トヨは忠次郎について多くを書き残しているのであるが、米国での活動については人為的にであろうか全く触れておらず、ただ彼の遺言に関してだけ記している。それは「……盲腸炎で彼の地に客死せられ、先生の最後の遺言の『第一として、学校の経営と女子体育の研究を藤村に続けて貰ひたい。第二として、自分の為に追悼会を開いて次の事を広

く全国に報告して貰いたい。研究の中途にして他国に於て客死することは残念の極みであるが、高橋は最後まで女子体育の為に真面目に研究して世を終ったと』当時臨終の際依頼を受けた人が貴骨と共に持って帰られた」⁹⁶⁾である。

今回忠次郎の米国での活動に関する次のような新たな史料を見出すことができた。それらは、①米国の忠次郎宛の書簡……これらにより、少くとも明治40年3月9日～41年2月16日はSeattle, Wash.に住み、英語学校を設立し、日刊新聞櫻洲新紙を発行した。少なくとも42年4月20日～43年1月27日はJapanese stone, Fife, Wash.⁹⁷⁾に住み日本村を組織した。同じく、44年12月から大正2年1月2日はAnacortes⁹⁸⁾, Wash.に住み、大正2年9月30日以降はKaki, Alaskaに住みアラスカ遠征中であった。②明治42年8月22日発行の松浦との共著「学庭遊戯法」⁹⁹⁾はシアトルから原稿を送り、「シアトル育児院」よりと記した。③大正2年12月10日に松島町で行なわれた葬儀における吊詞…「…果シテ遠大なる君が志ハ以テ足レリトセズ更ニ海外ニ雄飛シテ大ニ成ス所アラント欲ス三十九年十二月断然意ヲ決シテ北米合衆国ニ渡リ華州在留子弟ノ為学校ヲ設ケ新聞紙ヲ発行シテ自文筆ヲ執リ広大ナル農園ヲ興シテ禾矩ニ親ミ商會ヲ立テテ邦人ノ為ニ利殖ノ道ヲ講ジ極北アラスカヲ探検シテ事業ノ發展ヲ期シ成算ヲ抱キテ帰途ニ就クヤ偶、病ヲ得テ船中ニ没シヌ噫悲夫……」¹⁰⁰⁾④昭和3年発行の「宮城郡誌」…「…渡米して学校を經營し、アラスカに渡りて新事業を計画せるが、不幸病を得て歸國、療養せんとする途中にて不歸の客となる」²⁷⁾⑤昭和8年発行の「仙台人名大辞書」…「…或は渡米してアラスカに体操学校を設立するに奮闘ひとかたならざりしが、不幸病を得て歸朝の途次不歸の客となれん」¹⁰¹⁾

これらにより米国での活動は次の様であったと思われる。

シアトルに上陸すると、「シアトル育児院」という邦人子弟のための英語学校を創立し、「櫻洲新紙」という日刊邦字新聞を発行し自ら筆をふるった。明治42年初頭頃、Fifeへ移り、日本村“Japanese stone”を作り、広大な農園で自らも耕した。さらに商会を設立し邦人のために利殖の道を開いた。44年末にはAnacortesに移りアラスカ探検の準備をすすめ、大正2年の9月にはアラスカに渡り、Kaki, Alaskaに体操学校設立の見通しを立てシアトル¹⁰²⁾へ一旦戻ろうとする途中に盲腸炎のために船中で没し、シアトル日本人会の手により葬儀が営まれたのであった。

これらの事項について、シアトル総領事館を通して、邦字紙「北米報知」¹⁰³⁾に調査依頼をし、尋ね人として記事の掲載をし、シアトル市、タコマ市の日系人会に問い合わせをしたが忠次郎と前述の事項を知る人はなく、総領事館の調査においてもこれらの事項を見い出せず死亡届もすでに存在しなかった。¹⁰⁴⁾Seattle Public Libraryにも同様に調査を依頼したが、図書館の資料からは、どの点についても関連事項は見い出す事ができなかった。¹⁰⁴⁾また当時開校していたUniversity of Wasnirngton, 及びSeattle UnirersityのRegistrars Office, Office of Graduate Recordsには修学の記録はなかった。

死亡については外交史料館にシアトルの領事から外務省宛に死亡診断書を添えて、大正2年11月8日付で届けられたとの記録¹⁰⁶⁾があり、外務省から松島町に届けられた。死亡診断書は27年間保存されたのち、すでに処分された。「大正貳年拾月拾六日午前拾壹時拾分死亡、

同月参拾日北米合衆国ワシントン州シアトル帝国領事館に届出…」と忠次郎の除籍簿に記されているのである。

シアトルでの調査では裏付けをできなかったが忠次郎は渡米後は、体育研究とは離れていたのであろう。そのために、これまで米国での活動は明らかにされなかったのではないかと思われる。

おわりに

本稿では高橋忠次郎の生涯と彼が東京女子体操音楽学校を創立した事情について述べてきた。忠次郎は体操伝習所の教育を受け継いだ、私立東京体操伝習所に学び、小学校訓導として文学会を設立した事により明治26年に講師の西村正三郎に出会い、彼から遊戯研究と女子の体操に音楽を結びつける事をすすめられ、西村らと日本遊戯調査会を設立したのであった。日本遊戯調査会の活動は一時停滞していたが、忠次郎が四国赴任から上京し、日本体育会体操学校、女高師の教師として活躍するとともに活動を再開し、34年9月には「遊戯雑誌」を発行したのであった。彼は教師の経験、遊戯研究、女子体育研究を生かす実践の場として35年5月に我国初の女子体育教員養成機関として東京女子体操学校を創立したのであった。彼にとって学校は、彼が体育界に存在したという記念碑であった。彼は実際には創立者であったが監督の地位にあり、37年3月には創立者に、39年4月には校長にも就任したのであったが、彼は学校の安定を見、彼の主張は体育界の流れに納得できなくなって来、39年12月には、これまで進めてきた転職計画の実現としてシアトルへ渡ったのであった。その後は学校の危機にも帰国する事なく、数々の事業をなし、遂には大正2年10月に異国の地に没したのであった。

本稿では彼の生涯と東京女子体操音楽学校との関係についてのみ記した。彼の遊戯論、女子体育論、東京女子体操音楽学校の教育については今後の課題としたい。

謝辞

本研究の史料収集にあたりお世話になりました松島町の高橋勝さん（高橋忠次郎さんの姪のきよせさんのご令嬢）、白戸匡行さんに深く感謝の意を表します。

注

- 1) 戸籍や松島町時代の書物、松島第1小学校沿革史、明治20年11月8日の「小学校授業生」の免許状、昭和8年発行の「仙台人名大辞書」には、忠治郎と記されており、明治23年3月20日の東京体操伝習所の卒業証書およびそれ以降の免許状、著作物には忠次郎を用いている。なお彼の墓も忠次郎と記されている。
- 2) 今村嘉雄「日本体育史」、不昧堂、昭和45年、P.448、また、今村嘉雄他編「新修体育大辞典」、不昧堂、昭和51年、P.956、大石三四郎編「体育人名辞典」、逍遙書院、昭和45年、P.131も同様である。
- 3) 竹之下休蔵、岸野雄三「近代日本学校体育史」東洋館、昭和34年、P.59
- 4) 「藤村学園70年の歩み」藤村学園、昭和47年、P.20
- 5) 竹之下休蔵、岸野雄三、前掲書P.59、および「藤村学園の70年の歩み」P.18は34年と

- し、今村嘉雄、前掲書、P.459、今村嘉雄他編、前掲書、P.956および、大石三四郎編、前掲書P.131、野勢修一、「明治体育史の研究」、逍遙書院、昭和45年、P.215は35年としている。秋葉尋子「『遊戯雑誌』における日本遊戯調査会の活動」（日本体育学会第24回大会号）昭和48年P.35は34年以降の日本遊戯調査会の活動を報告している。創立期の事情については述べていないが、創立日は26年11月3日としている。
- 6) 「藤村学園70年の歩み」では実際の実立者であるが当初監督であったとするが、今村、前掲書P.448、今村編、前掲書、P.956 大石編、前掲書、P.131、竹之下・岸野、前掲書、P.59では設立者であるとする。
- 7) 渡米と客死については、今村編、前掲書と「藤村学園70年の歩み」に記している。しかし、米国に於ける活動は全く不明で、死亡日も確認されていない。
- 8) 当時は戸番を用い、旧い順に番号をつけていた。明治31年の改正で地番を使用することとなり、現在は松島町14番地である。
- 9) 遺族の高橋勝さん（72才）、隣家の林なほよさん（78才）、昭和53年8月談
- 10) 著作文に本名の代わりに用いたり、所持品に記した。渡米後は「櫻洲」と称し、墓にも刻してある。
- 11) 宮城県宮城郡教育会「宮城郡誌」昭和3年、P.941
- 12) 同上、P.149
- 13) 松島町誌編纂委員会「松島町誌」昭和35年によると、14年4月、高城初等学校、19年4月高城尋常小学校、23年4月松島尋常小学校となり、現在は松島第1小学校である。
- 14) 松島第1小学校「学校沿革史」によると、20年12月22日に月俸4円で拝命している。22年5月7日から6月1日まで1時退職し10月18日依願退職と記載されている。
- 15) 宮城郡長から20年11月8日に3ヶ年間の「授業生」の免許を得た。
- 16) 大場一義「体育教師養成機関の変遷（明治期）」筑波大学講義用資料
- 17) 東京都公文書館願伺録（筑波大学、大場一義先生資料による）によると、明治期に東京には、官公立を含めて17の体育教師養成機関が開廃校された。
- 18) 他の4校は、私立東京体操学校（20年5月7日開校、宮城師範学校卒業の佐藤信有による）、私立東京体操専修館（20年10月3日認可、戸山学校、高師修学の吉村信盛による）、私立東京体操専門学校（21年3月2日認可、東京府体操術速成伝習所卒業の古賀与一と、私立東京体操学校来業の萩谷音次郎による）私立東京体操専修学校、（21年10月3日認可、私立東京体操伝習所及び東京府体操術速成伝習所卒業の依田直伊と、私立東京体操学校卒業の小嶋市次郎による）。
- 19) 私立東京体操伝習所開校願、「明治十九年願伺届録」東京都公文書館
- 20) 今村嘉雄、前掲書、P.352
- 21) 東京体操伝習所規則、明治21年8月、P.1
- 22) 私立東京体操伝習所開校願
- 23) 藤村トヨ、「十年計画の第二回目の欧州視察の所感」昭和5年、
- 24) 東京体操伝習所規則、明治21年8月、
- 25) 東京体操伝習所規則、附録広告、明治22年4月、
- 26) 高橋勝さん談、昭和53年8月
- 27) 宮城県宮城郡教育会、「宮城郡誌」昭和3年 P.1315
- 28) 「日本遊戯調査会の昨日今日」（遊戯雑誌2巻3号）明治36年5月15日 P.46
- 29) 教員は同上書P.47によると次の通りであった。教育……尺秀三郎、篠田利英（のちに27年1月西村正三郎に代わる）、倫理……立花鉄三郎、心理……元良勇次郎、松本文学士（教育時論315号には欠く）、国語……畠山健、三橋要也（教育時論315号には欠く）

漢文……根本通明，中島幹事であった。

- 30) 「教育家の文學會」(教育時論309号)明治26年, P.35
- 31) 「文學會の發会式」(教育時論315号)明治27年, P.33
- 32) 「政論禁止の訓令」(教育時論308号)明治26年, P.7。26年10月28日の井上毅文相の訓令11号
- 33) 能勢栄「大日本教育会に対する意見」(教育時論310号)明治26年, P.14~15
- 34) 「日本遊戯調査会の昨日今日」前掲28), P.47
- 35) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻4号)明治37年1月15日, P.39
- 36) 29)の様に西村が篠田に代わり講師となったのは27年1月と教育時論315号P.33には報じているが、それ以前から交替していたのであろう。
- 37) 高橋忠次郎「理論實際小学遊戯教科書」榊原文盛堂, 明治39年, P.52~53
- 38) 「開發社長西村正三郎君逝く」(教育時論, 389号)明治29年, P.5~9
- 39) 西村正三郎, 「教育学史」, 敬業社, 明治30年 P.231
- 40) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌2巻4号)明治36年6月15日 P.46~48
- 41) 同上2巻6号, 明治36年7月30日 P.44~45
- 42) 同上3巻2号, 明治36年12月15日 P.43
- 43) 高橋忠次郎, 前掲書 P.29~30
- 44) 同上
- 45) 「故西村正三郎君の葬儀」(教育時論389号)明治29年, P.25
- 46) 高橋忠次郎, 前掲書, P.53
- 47) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻4号)明治37年1月15日, P.39
- 48) 同上, 3巻2号, 36年12月15日, P.43
- 49) 香川県師範学校 年報
- 50) 藤村トヨ「私の歩んできた道」(学校体育6巻8号)昭和28年8月
- 51) 藤村トヨ「私の六十年の念願」(同窓会誌第2号)1935, のみ後者をとる。「藤村学園70年の歩み」も後者をとる。
- 52) 「学校法人日本体育会体操学校八十年史」学校法人日本体育会昭和48年, P.167~210
- 53) 依田直伊は18)を参照。簿記精脩学校にも学んだ。小野泉太郎は忠次郎と日本法律学校の同窓であり, 当時, 華族女学校の教師であった。
- 54) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻5号)明治37年2月15日, P.30
- 55) 日本体育会体操練習所で野球をしたという記述と写真がある。
- 56) 明治34年2月から35年6月まで
- 57) 高橋忠次郎, 依田直伊「音楽応用女子^{体操}法全」山海堂, 明治33年, P.1
- 58) 香川新報明治35年5月25日, 28日付に大運動会の記事が掲載されているが, 特にトヨについては記していない。
- 59) 藤村トヨ「私の歩んできた道」前掲書50)
- 60) 「高松に於ける講習会状況」(遊戯雑誌2巻1号)36年2月25日, P.50
- 61) 高橋忠次郎, 前掲書 P.54
- 62) 「日本遊戯調査会規則」(遊戯雑誌3号)明治34年12月25日, P.52
- 63) 同上, 10号, 明治35年9月15日 広告
- 64) 同上, 2巻5号, 明治36年7月12日, P.3~8

- 65) 忠次郎は39年7月の「理論実際小学遊戯教科書」P.54では2府9県に支会と支部を設けたと記している。
- 66) ドミノース(1号), テンピンズ(1号), 智恵の木(2号), 玉突術(3~8, 10号), 施廻運動(4~6号), ジャーマン・ビリヤーズ(2巻2~4, 6号), クロスボルカ(2巻6号), 攻城球(3巻5.6号, 4巻1号),
- 67) 十字施廻運動(2~3号), 二重大連鎖(四季のながめ)(3号), 姫鏡(4~5号)
- 68) 尋常科遊戯教授実験談(2巻1号), 胸膈拡張器使用法(2巻3, 5, 6号), 日本遊戯調査会主幹高橋忠次郎君講話(3巻3, 4号)
- 69) 遊戯雑誌, 2巻5号, 明治36年7月12日, P.8
- 70) 遊戯雑誌, 3号, 明治34年12月25日
- 71) 遊戯雑誌9号, 11号
- 72) 高橋忠次郎, 前掲書 P.54
- 73) 遊戯雑誌の記事, 広告によると, 明治30年頃発行され, 34年頃訂正版が発行されたと思われる。しかし未見である。
- 74) 遊戯雑誌3巻3号の広告によると, 男子を対象とし, 師範学校, 中学校, 高等女学校体操科教員及び各地体育場の教員を養成し, 6カ月の速成教授で第1期生五拾名の申込期限は明治37年1月15日であったが, 公文書はなく, 実際に開校したか否かは不明である。
- 75) 明治36年11月3日に要則を定めると同時に第1回祝賀舞踏大会を挙行了。これまで宮中等では舞踏が盛んであったが, 国民一般にも費用をかけずに練習の機会を与えようとするものであった。東京女子体操音楽学校内に練習部が置かれた。
- 76) 遊戯雑誌, 3巻3号, 明治36年12月15日 P.9~10
- 77) 成瀬仁蔵「女子教育」明治29年
- 78) 千葉通子「女子体育の成立過程に関する研究 — 明治時代の女学校を中心として —」(東教大修士論文昭和50年2月)
- 79) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻6号) 明治37年3月25日, P.34
- 80) 藤村学園関係史料 I
- 81) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌6号), 明治35年4月25日 P.62~64
- 82) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌8号), 明治35年7月5日 P.50
- 83) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻6号) P.35~36
- 84) 「私立東京女子唱歌学校設立願」(藤村学園関係史料 I P.232)
- 85) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌4巻1号) 明治37年4月15日, P.31
- 86) 同 上 P.32
- 87) 藤村トヨ「私立東京女子体操音楽学校沿革」, 大正14年1月16日
- 88) 藤村トヨ, 「30年間の我校の経営」(女性美4巻8号), 昭和7年 P.163
- 89) 明治40年第1種学事, 私立学校第1巻, 東京都公文書館, 日付が記していないが, 住所と卒業生名から38年4月~8月と推察する。
- 90) 藤村トヨ「如何に女子體育家の向上をはかるべきか」(女性美6巻10号), 昭和9年 P.3
- 91) 河北新報, 明治39年12月8日付
- 92) きよせも同行する予定であったが勝さんの出生により断念した(昭和53年8月高橋勝さん談)
- 93) 宮原小治郎「卅九年に於ける信州体操界」(信濃教育会雑誌244号), 明治40年
- 94) 高橋忠次郎, 前掲書, P.24
- 95) 藤村トヨ「十年計画の第二回目の欧州視察の所感」, 昭和5年,

- 96) 藤村トヨ, 「学校の成り立ちと同窓会の創立について」 (同窓会誌第1号) 昭和9年,
P. 2
- 97) FifeはSeattleから約30マイル南の小さな町である。(Seattle Public Libraryによる)
- 98) AnacortesはSeattleから約60マイル北にあるPuget Soundにある Fidalgo島の町である (Seattle Public Libraryによる)。
- 99) 松浦政泰, 高橋忠次郎, 「家庭遊戯法」博文館, 明治42年
- 100) 阿部廣太「吊詞」, 阿部は「宮城郡史」によると, 忠次郎と同じ松島村磯崎の出身で
のちに町の助役をつとめた。
- 101) 菊田定郷「仙台人名大辞書」仙台人名大辞書刊行会, 昭和8年,
- 102) 帰途, 帰国は日本へという意味にもとれるが, 大正2年9月30日付の忠次郎宛の
Seattle 発信の伊東からの書簡には「8月25日に上陸したがアラスカに御遠征と聞き,
帰州の日を待っています。」とあり, 近々シアトルへ帰る予定であったことがわかる。
- 103) 昭和53年6月28日付に高橋忠次郎に関する調査を掲載した。北米報知は発行部数
約2,000部で広くワシントン州並ポートランドバンクーバーの日系一世に読まれている。
- 104) 昭和53年7月25日付, 11月2日付, 領事西川清氏からの書簡
- 105) 昭和53年11月27日付Seattle Public Libraryからの書簡
- 106) 「自大正二年八月至大正三年三月戸籍法=據り在外本邦人諸届書其本籍地戸籍吏へ送
達」第149巻, 3門8類7項21号。